

適切な支援に向けて

校長 山田 浩之

人は、一人一人違い、多様であること。その違いを認め合うことが大切であるということ。そして、新潟小学校は、可能な限り、支援を必要としている子どもに適切な支援を届けていくこと。これらを、一緒に学んでいる全校の子どもにも理解してもらうために、一年生から六年生まで、すべての学級で違いを認め合うための授業を行いました。

私が参観した、授業の様子をお知らせします。授業は、大きく四つのパートに分かれています。最初は、一人一人得意と苦手が違うということが確認です。例えば、走ることが得意か、苦手か、子どもに手を挙げてもらいます。算数でも同様に挙げてもらいます。その上で、走ることや算数と違って自分以外の人からは、分かりにくい苦手があるという説明をします。例えば、「注意されることや負けることが嫌いで、いらいらしてしまうこと」や「大勢が集まるところが苦手で、その場にいられないこと」などです。

二つ目のパートでは、友達の特性ととの付き合い方です。「何で走るのが遅いの」とか「何で計算が遅いの」とか「何でみんなと同じことができないの」という言葉を言われると、それが苦手な人にとっては辛く、悲しい気持ちになることに気付かせます。そして、学校は、優しい言葉で支え合い、助け合うところではなければならぬことを確認します。

三つ目のパートでは、新潟小学校には、一人一人の特性に合わせた学ぶ場所があることの説明です。少ない人数で自分に合った学習をする「なかよし学級」、静かな場所で自分のペースで学習できる「スタディールーム」、専門の先生がいる学校へ通って、くわしく教えてもらう「通級教室」があることを説明しました。ただし、それらの場所を勉強するということを自分勝手に決めるこ

とはできません。子ども自身の気持ちや考えは、もちろん大切にしますが、保護者、学級担任、サポーターする教員、校長、場合によっては、教育委員会など、いろいろな人が相談して決めることになっていくことを確認しました。

最後のパートでは、一人一人が、授業を振り返って、感じたことや考えたことをワークシートに書き入れます。

子どもたちのワークシートから抜粋します（仮名→漢字のような修正をしております）。

【中学年】「新潟小学校は、小さな社会だから友達を助けたりしないと、と思ったので、ほかの友達に向き合えるようにしたいです。」「友達や先生に助けられることって大切なんだなと思った。」「自分が得意でも他の人にはできないことや、自分が苦手なことでも他の人はできるように、ちがいがあるとなりました。」「やっぱり、得意や苦手は、人それぞれだと思いました（十人十色）。みんなとの違いを認め合いたいと思いました。」「【高学年】「お話を聞いて、人は、それぞれ感じ方が違って、私は、自分らしくしていいんだなと思いました。」「私は、みんなに得意不得意があって、そのことに合わせた社会になっていくのかなと思いました。」「自分のせいで誰かがこまっていたのかドキドキしながら話を聞きました。これから違いを感じてみようと思います。」

私たち新潟小学校の教員も、日々、子どもの新たな特性に気付かされています。適切な支援には正解がない中、支援の在り方を探っています。そして、子どもの特性を見るときに、ほかの子どもとの比較ではなく、その子ども自身に光を当てて頑張りや変化、成長を見定めることを心掛けていきたいと考えています。それを子どもにも返すことで客観的で肯定的な自己の見方が育ってほしいと期待しているからです。